【書評】

種橋征子著『介護現場における「ケア」とは何か』ミネルヴァ書房、2017 年.

梅　木　真寿郎

1. はじめに

本書は、2015 年に、種橋氏が同志社大学大学院に対して行った学位請求論文（博士論文）である「介護老人福祉施設の介護職員と利用者の間で展開される『ケア』についての研究－ケアプロセスにおける互いの「成長」に着目して」をベースに、3 本の論文とともに、一部書き下ろし再編集した上で、上梓したものである。種橋氏は、高齢者の介護実践に長年携わってきた経験を有しており、調査研究能力はさることながら、豊かな実践知に裏付けられた社会福祉実務感覚を兼備した研究者である。種橋氏とは、同時代の高齢者福祉実践を共に経験し、また同志社大学大学院においても文学研究科時代の岡本民夫先生研究室の同門であるとともに、岡本先生のご退職後も後任の木原活信先生研究室に移籍した同志である。もう 10 年ほど前になるであろうか、本書にも随所に用いられているメイヤロフ（Mayeroff, M. 1971）の On Caring の原書を種橋氏らと木原研究室の中で訳出し、共に議論したことを懐かしく思い出す次第である。そのようなこともあり、評者自身、種橋氏の博士論文そして単著を最も心待ちにしていた者の一人である。種橋氏の研究については、大学院時代の研究室でそして学会で、またある時はプライベートに食事を共にする場などで熱意ある主張を拝聴する好機を得、これまでも大変刺激を受けてきた。そのような経緯もあることから、浅学な身であり、大変僭越なことであると承知の上で、ここに本書への敬意を表し以下、論評を試みたい。

本書の特徴は、「介護」「ケア」の定義そして概念を先行研究から丹念に精査し、抽出を試みている点にある。そしてそれらの「介護」「ケア」の概念が、福祉士養成テキストによってどのように記述されてきたのか、「新・旧カリキュラム」の比較を通じてその現状について明らかにした点をあげることができる（**表 2-1**、**表 2-2**）。また、それらの「介護」「ケア」の概念を形而上学的な議論に終始させることなく、実際に介護老人福祉施設に従事する介護労働者（介護施設の介護職員と訪問介護員を含む介護職員のこと、23 頁）とそこに暮らす入居者（サービス利用者）の双方に対するヒアリング調査を通じた質的分析を試みている。これらの調査で得られたデータの知見に基づいて、両者の間で展開される相互関係から「ケア」の概念に内包される相補的な関係性の実証を試みた上で、ケアの概念を帰納法的に構築した点は、類書にはない本書の成果といえる。

2. 本書の研究対象と目的

本書は、高齢者福祉への市場原理の導入に伴い、「本来対等であるべき援助関係が顧客獲得のために変容すること」「社会福祉における援助機能が損なわれることを危惧した」ことを研究の端緒としている。そして本書が射程とする研究対象は、介護老人福祉施設で展開されるケアの営みであり、利用者そして介護職員の相補的関係性の中で織り成されるもの（双方向的な関係性を有するもの）として位置づけられている。したがって介護職員から一方向的に展開されるものではない。本書における研究目的は、次の 3 点があげられる。①「ケア」の概念を介護老人福祉施設の介護職員と利用者双方の関わりにおける認識から明らかにすること。②この「ケア」の概念を介護職員が理解する意義を考察すること。③介護職員にとって負担が少なく取り組みやすい「ケア」の概念の教育・研修方法とその課題について考察する

ことの以上３点を目的としている。

3. 本書の構成と内容

本書はA5版・総頁数352頁の単著作であり、はしがき、序章に加え９つの章からなる全３部での構成となっている。以下各章の概要を述べると次のとおりである。

まず、序章「なぜ今、介護現場において『ケア』の概念の理解が必要なのか」で、氏は「介護労働者が提供するサービスに対し、利用者が満足と評価すればそれでよいのであろうか」と介護現場が直面する課題に対して問いかけている。介護職の道具的な援助が強調される中にあって、改めて「ケアとは何か」を問う必要があるとその問題の所在が述べられている。

次に第Ⅰ部「『ケア』とは何か」であるが、第１章と第２章の２つの章で構成されている。第Ⅰ部では、哲学・倫理学、看護学・介護福祉学などの領域でみられる「ケア論」に関する先行研究を概観し、「ケア」とは何かについて、これまでどのような議論がなされ、どのように「ケア」という概念が記述されてきたのかについて文献研究を行ったものとなっている。

第１章「哲学・倫理学領域の『ケア』の概念」では、「ケアの特性」について、①ハイデガーの「現存在の他者との関わりの様態」（解放ないし支配する待遇）、②メイヤロフのケア論から「他の人格（another）をケアするとは、もっとも深い意味でその人が成長（grow）し、自己実現すること（actualize himself）を助けることである」に加え、「相応しい対象（appropriate others）」を見出し、自己の生の意味を発見し創造していくことを意味する「場の中にいること（in-place）」、そのことこそが自分の生の中での安定性（being at home）や了解性が醸成されること、「過程における両者の関係性の変化やそれぞれの内的変化（変化可能性）」、③ノディングズのケア論「助け合い（reciprocity）」「関係性の中で自律性が高められる相互補完性」「他者の状況に合わせた援助や気遣い（個別性、文脈依存性）」などから整理を試みている。また「ケアの倫理」に関するギリガンやノディングズの主張やクーゼの批判的な見解を通じて、「ケアの概念」「ケアにおける成長」「ケアされる人の『成長』」について措定している。

第２章「看護・介護福祉領域の『ケア』の概念」では、看護領域から①ナイチンゲール（配慮・気配り）、②ワトソン（トランスパーソナルなケア）、③ローチ（職業的ケアリングとしての「思いやり」「能力」「信頼」「良心」「コミットメント」）やボイキン（ケアする存在としての人間、他者との関係の中で人間性が高められる）など多数の論者の概念を精査している。また、介護福祉領域では、福祉士養成テキストに見られる「介護」「ケア」の定義・概念を整理している。

次に第Ⅱ部「介護老人福祉施設にみる『ケア』の捉え方」であるが、第３章から第６章までの４つの章で構成されている。第Ⅱ部は、介護老人福祉施設５施設の15名の介護職員、同施設の15名の利用者に対して行ったインタビュー調査（半構造化面接）のデータに対して、質的内容分析（グラネハイムらの示すQuality content analysisを援用）を行ったものである。

第３章「介護職員からみた利用者との間で展開される『ケア』」では、３つの内容領域である「ケアすること、されること、関わりを通した変化」「対応困難な利用者との関わり」「意思疎通の困難な寝たきり利用者との関わり」について分析している。最後を生きる「利用者の存在」が、介護職員に対して人の生のあり方や意味を教え「ケアしたい」という気持ちを引き出し、介護職員の成長を助ける（ケアする）存在であることなどが明らかにされている。また、そのような肯定的な側面だけではなく、利用者に対する「わからなさ」や「いらだち」など精神的に追い詰められる点も指摘されている。

第４章「利用者からみた介護職員との間で展開される『ケア』」では、２つの内容領域である「ケアすること、されること、関わりを通した変化」「印象に残っている介護職員のこと」について分析を行っている。介護職員のつらさや若さという脆弱性に引き寄せられて、利用者自身が「ケアする」ことがここでも確認されている。また、利用

者は介護職員に自らの存在が認められていることを通して、安心感を得たり、自発性を高めるといった成長する主体でもあると述べられている。

第5章「介護職員と利用者の関係性」では、3つの内容領域である「関係の中で認識していること」「互いの関係性についての認識」「互いの存在」について分析を行っている。介護職員、利用者ともに相手に対し役割や立場を認識しながらも、一人の人間として相手の独自性を認め合い親しみの感情を抱いていることが明らかにされている。しかしその一方で、親密性の高さが、節度や客観性に対する危うさを内包する点や関係性における相性の存在とそのことから来る影響としての親密性の低い関係性といった課題も浮き彫りにしている。

第6章「介護職員と利用者の認識から明らかになった『ケア』の概念」では、第Ⅰ部の先行研究を通した演繹的な「ケアの概念」と、第二部の第3章から第5章の質的調査で明らかになった帰納的な「ケアの概念」から新たに抽出可能な「ケアの概念」を提起するものとなっており、本書における問いである「ケア」とは何なのかについて、著者自身が自らの「ケア論」を展開するものとなっている。また、ケアの実態を介護職員と利用者の相互関係の側面から分析し、「承認」と「信頼」そして「自信」と「安心」の循環的過程こそが、ケアの中での「成長」を支えるものであると指摘している。

最後に第Ⅲ部「『ケア』の概念の教育の必要性」であるが、第7章と第8章2つの章で構成されている。この第Ⅲ部は、介護職員に対する「ケア」の概念教育の必要性を述べた上で、研修プログラムのモデル事例を実践し、その結果に基づいて介護職員にとって、負担が少なく取り組みやすい「ケア」の概念の教育、研修方法を提案するものとなっている。

第7章「介護職員が『ケア』の概念を理解する意義」では、一つの介護老人福祉施設の介護職員10名に対して、ケアの概念を学ぶ研修プログラムを実施し、「利用者との間で気遣い、気遣われた、助け、助けられた経験」「利用者に対する志向」については事前並びに事後のインタビュー結果を、「研修プログラムを終えての認識の変化」「研修での学びを今後にどう活かすのか」については、事後インタビューの結果を分析している。氏によると、介護職員が「ケア」の概念を理解する意義として、「利用者と自分の存在に対する認識の変容」「自分たちの仕事の意義の理解」の大きく2つの意義が見い出せたとしている。具体的には、尊厳ある対等な一人の人間としての認識への変容であり、その結果、ケアが決して単なる道具的な援助や作業というものではなく、他者と共に生きる社会的存在である人間として「成長」するものといった尊い営みであることが指摘されている。

第8章「介護職員に対する『ケア』の概念の教育、研修方法とその課題」では、ワークシートを用いた研修プログラムであるワークショップを行い、2か月後に実施した記述式アンケートの結果を分析している。「ワークシート記入」について、利用者の言動や関わりにおいて得た認識をどう解釈したのかとの問いに対して、援助の手立てなどが記載される状況があったこと。継続して実施していくことの難しさなどが述べられている。また、施設の組織文化の中で、利用者と介護職員、職員同士の「ケア」の関係性を醸成し、チームで「ケア」の概念の教育、研修を行う必要性を提起している。

そして本書の総括と今後の課題を述べた終章「介護現場で『ケア』を実践していくために」では、介護職員の精神的負担の大きさに対する「職員間のケアの関係性も必要」である点を指摘している。そして、その状況改善のための方法として、「『ケア』の概念を組織の理念として採用し、利用者と介護職員間、あるいは介護職員同士、介護職員と管理職員間など人と人との関係性において『ケア』の関係性を醸成する組織作りを目指すことが有効である」と述べている。そして、今後の課題として、「ケア」の概念を内在化する教育、研修の方法のモデルが開発途上である旨の課題をあげ、本書を閉じている。

4. 本書の意義と課題

本書を貫通する問題意識の一つは、「人権意識や思想がなければ、介護自体が単なる道具としての援助、作業で終わってしまう」といった差し迫った実践現場の現状に対する危機感である。このような思想の重視を強調した論者で戦前に同志社大学で社会事業の教鞭をとった教授の一人に、大林宗嗣という人物がいる。彼は、次のように（社会）思想の重要性そしてその必要性について言及している。

> 社会思想の確立に依って其の社会が動き、社会思想が変化して参りますとその変化に伴って社会組織が変って行くものであるから社会思想を以て空漠なものである。抽象的なものであるとして之れを顧みないことは誤ったことである、否、寧ろ其反対に社会思想の変化に対しては吾々は極めて敏感であらねばならぬ、これが社会思想の変化を研究する大切な所以であります。　（大林 1924：13）

この大林の指摘は、思想はただの言葉遊びではなく、その思想の研究を通じて、思想が実体の組織をすら変化させ得るものとして位置づけている。氏が行った「ケア」の概念の研究もまさにこの点に通じるものであり、「ケア」の概念の思想的確立を図ることによって、単なる道具としての介護ではなく、尊厳性をもったケアのあり方、そしてそのことを大切にする組織への転換を企図したものということができよう。

本書の意義としては、「介護老人福祉施設」における「ケア」の概念について、「ケアとは何か」について、幅広い先行研究をレビューした上で現状の研究課題を明らかにし、実際に介護職員や利用者に対して行ったヒアリング調査を通して抽出されたケアの概念を提起したことにある。若干長い引用となるが、その点を提示しておくことにする。

> 「ケア」とは、「相手のことや抱える痛み（脆弱性）を知り、共感することによって、相手にとっての良好な状況に向かうよう働きかけたり、同様な経緯や意図で自分が相手から働きかけられることから始まる相互の関わりの過程において、相手から自分の存在や独自性を認められたり、信頼されることによって、自分に対する信頼や安心感を得たり、相手の存在を認め、信頼すること、また相手に自信や安心感を与えようとすることを通して、その中で得た経験やその意味を自らに統合し、新たな価値観や指針を獲得したり、自分の居場所を得て現状を肯定できるようになったり、相手にとっての良好な状況へ働きかける意欲を高めるなど、その人にとっての良好な状況に向かって変化していくこと」であると言うことができる。
>
> （種橋 2017：192-193）

また、氏は次のようにも述べている。「『ケア』とは、われわれが社会的な存在として生きる営為そのものであり、自他がともに互いに生かし合って生きることなのである」（種橋 2017：193）。これらの「ケア」の概念・定義については、概ね首肯することができる。

ただし、以下の点については、若干の議論の必要性を感じるため指摘しておきたい。

まず、第Ⅰ部における「ケア」の概念抽出の方法についてである。哲学・倫理そして看護・介護福祉の領域からの概念抽出を図っているわけであるが、ここで「社会福祉」ではなく「介護福祉」の切り口からの抽出に限定して議論されているところである。仮にここに社会福祉の切り口から考察を試みようとしたならば、当然のことながら「障害者福祉」の介助関係の議論は避けられないことになる。しかし、本書においては、最も身近にあるはずの「介助関係」の議論が展開されていない。このことは、「介護自体が単なる道具としての援助、作業で終わってしまう」ことに関して、そもそも「なぜそう言えるのか」についての論理的な説明の所在に関係してくる。この点については、障害者運動の文脈の中で、所謂「介助者手足論」や「自立生活モデル」と呼ばれる介助関

係の議論が存在する（菅 2010：42）。もちろん、「介護」や「ケア」ではなく、この文脈ではあくまで「介助」ではあるものの、介助関係に内在する非対称性を前提とした当事者の自己決定と介助をめぐっての議論は、ケア論を論じる上では看過できないものではないかと考える。このことは、「その忙しい状況に合わせるしかなく、我慢やあきらめを強いることになってしまっている」（種橋 2017：155）と氏が指摘する部分とも関係してくる。利用者が介護職員に対して遠慮する構造は、権力関係がそこに存在するからこそであって、介護関係における非対称性の表れとも考えられる。また、「利用者たちにとっての『ケアする』対象は施設外にいるのではないか」（種橋 2017：179）との言及がある。まさにこのあたりは、上記の「介助関係」の類になるが、その生き方を利用者自身が自己決定のもと行った場合、そこには「ケア」の関係性は形成されないと果たして断言できるのであろうか。利用者が自己決定した場合であるならば、この「介助関係」的在り様を多様な生き方に寄り添うという視点で捉えなおすことは不可能なのであろうか。私見を述べると、「ケア」にはそれらを乗り越える可能性は十分に秘めていると考える。だからこそ、この点について論究すべきではなかったのだろうか。

二つ目が第Ⅲ部で展開される「ケア」の概念を学ぶ一連の研修プログラムの受講対象の設定とワークシートの難易度の設定についてである。氏が介護労働における精神的負担感やバーンアウト、離職率について強い関心を持っていることは個人的に承知しているところである。そうであるからこそ、次の点は大きな課題と言わなければならない。勿論、研修プログラムについては、開発途上であると言及されているところではあり、氏には是非ご一考いただきたいと考える。それは、そもそも当該研修プログラムの対象から「介護職員となったばかりの職員」（種橋 2017：226）を除外している点にある。実施研修プログラムの性格上、すでに利用者との関わりの経験をもつ介護職員を前提にしていることになる。しかし、本当の意味で、氏が提起する「ケア」の概念を学ぶべき対象とは、現に精神的負担感を最も抱えている介護職員であると言える。介護労働安定センター（2018）の「平成29年度『介護労働実態調査』の結果」によると、離職した介護職員の勤続年数の38.8％が1年未満の者であり、雇用形態別で見ると非正規雇用でかつ常勤雇用の介護職員の場合、47.3％が1年未満で退職している。氏の調査においても介護職員の「募るいらだち」（種橋 2017：109；124）が指摘されている。したがって、そのような早期離職をしてしまう介護職員に対して、「ケア」の概念の教育、研修方法こそが開発されるべき内容と考えられる。もちろん、氏が指摘するように、「職員間の『ケア』の関係性」の必要性も考えられるが、職員同士で共有された経験や認識を概念化できるかといったファシリテータ機能の脆弱性についても併せて確認されていることから、現状ではこの点は未だ克服できていないといえるのではなかろうか。いずれにせよ、早期離職をしてしまう介護職員に対する「ケア」の概念の教育、研修方法のあり方について、氏による今後の研究が俟たれるところである。

文献

・介護労働安定センター（2018）「平成29年度『介護労働実態調査』の結果」（http://www.kaigo-center.or.jp/report/ h29_chousa_01.html）.

・大林宗嗣（1924）「輓近の社会問題」『南豫夏季大学講演集』南豫文化協會、1-129.

・菅由希子（2010）「自立生活における身体障害者と介助者の介助関係に関する研究の現状と課題」『社会福祉学部研究紀要』13、41-48.

・梅谷聡子（2018）「書評　種橋征子『介護現場における「ケア」とは何か―介護職員と利用者の相互作用による「成長」』（ミネルヴァ書房、2017年）」

・埋橋孝文 編『同志社大学社会福祉教育・研究支援センター　ニュースレター』26、20-21.